

平成30年度

推古天皇 磯長山田陵台風被害木処理工事に伴う立会

はじめに

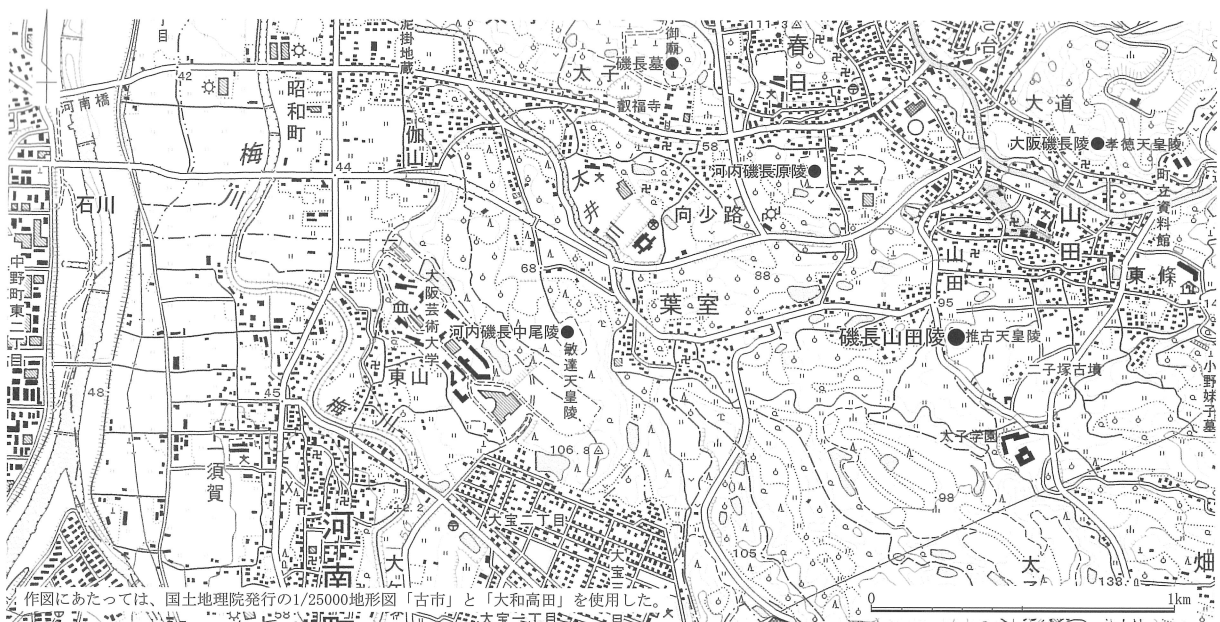
推古天皇磯長山田陵（以下、「当陵」という）は、大阪府南河内郡太子町に所在する（第71図）。当陵では、平成30年の台風21号通過によって、墳丘第3段目東側斜面で根起きが発生し、貼石とみられる遺構が発見された（第72図）。本報告は、台風被害木処理前に、根起きで毀損した遺構の現状を確認し、記録作成と復旧作業にかんするものである。標記の立会は、平成30年度に実施した被害木処理工事前、毀損した遺構の状況を確認のうえ記録し、遺構を保護することを目的として、陵墓課職員が平成31年3月11日から13日までおこなった。

1 作業の状況

作業は3月11日の午後から、まず測量杭を墳丘上に設定し、レベル移動を実施した。その後、3月12日に被害状況写真撮影のための清掃と撮影をおこない、被害状況の平面図と立面図を作成した（第73図）。根起き箇所は、大きく窪んでいたため、3月13日にそこへ土と土嚢を充填し、貼石の復元作業と復元状況の写真撮影を実施してから、復元状況の平面図と立面図を作成した（第74図）。復元した貼石の保護には、陵墓課職員による立会後に古市陵墓監区事務所職員が土嚢を積んで対応した。

2 作業の成果

立会の成果としては、被害箇所の情報を記録し、復元作業をしたことである。貼石の復旧作業時、南側の上下2石については、ややずれていたものの、本来の場所からそれほど離れたものでないことから、比較的確度の高い復元になったと考える。ただし、北側の上下2石については、根起きで生じた穴に完全に転落したものであることから、石表面の風化度合いや凹凸をみて、その復元位置を判断した。そのため、北側については、南側よりも復旧の確度は低いものとなっている。また、レベル移動時に陵墓地形図の基準高（境界標石52号より）を使用したため、T.P.（東京湾平均海面）ではない点に注意が必要である。

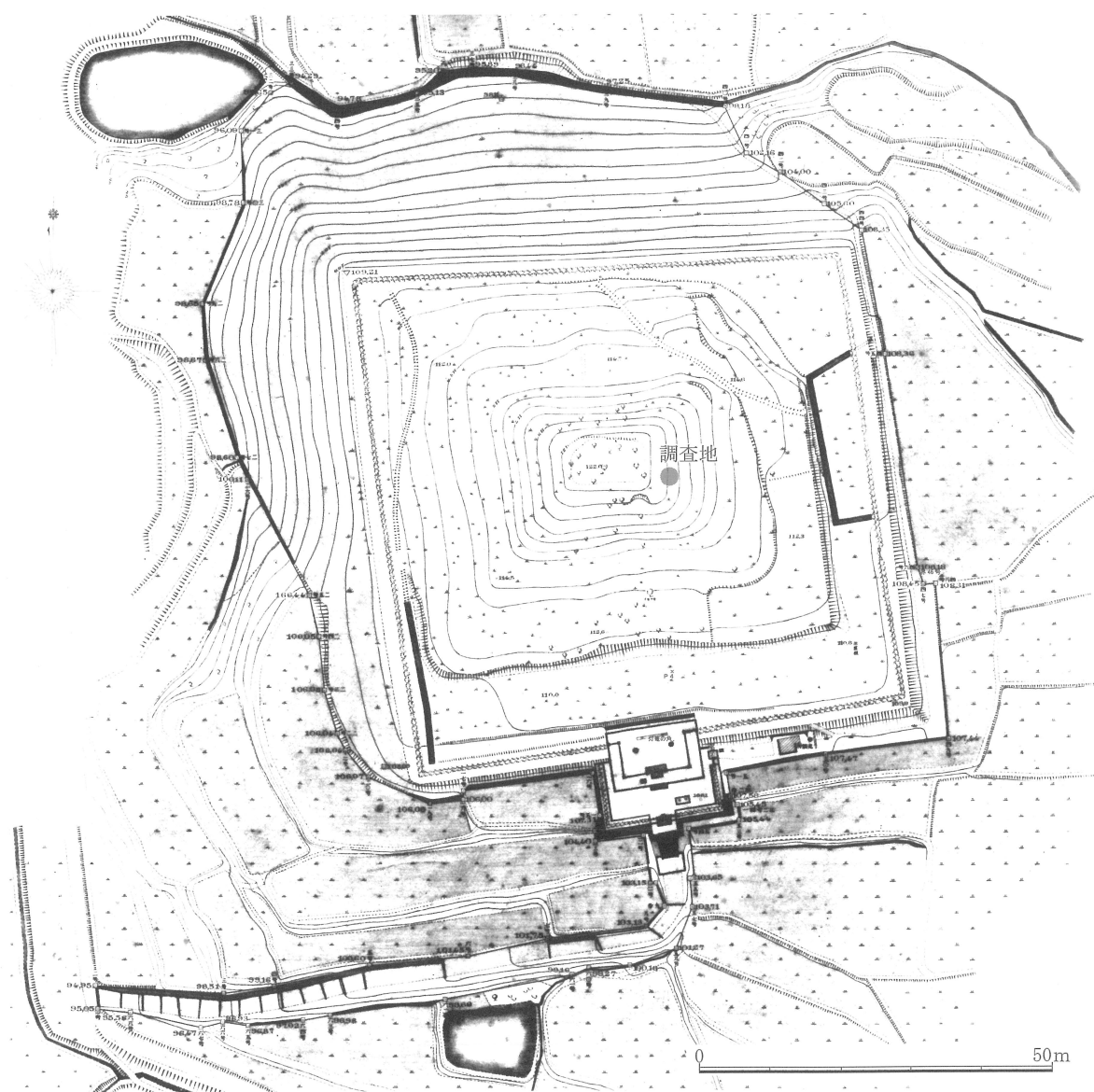


第71図 磯長山田陵 位置図 (1/25,000)

3 貼石について

貼石の記述 当陵の貼石については、末永雅雄が 1961 年に出版した『日本の古墳』のなかで記述している。少し長いが現地観察による貴重な内容のため、引用しておきたい。「ただ現地についてみると封土の傾斜が急であり、意外に整然とした方形を保っているのは、表面に見えないが芝生に覆われた下に貼石がある。これが千三百年の風雪からよく封土の流出や崩壊を守ったのである。葺石と貼石とは同じような目的のもとに古墳に使用せられるが、葺石は礫石を重ねて置き、その厚く葺いたのは三〇 cm 以上に達する場合さえある。貼石はやや面積の広い扁平な石を一重並べにして封土上に貼りつける。その典型的な例はつぎに挙げる石舞臺古墳に見られる。推古陵の方形がいまも殆ど損傷のないのは、貼石の保護によるものと思われる。」⁽¹⁾

貼石の観察 末永の後、1989 年に福尾正彦が当陵の墳丘調査を実施した際には「貼石と称されるものに関しては、その存在を記した報告文があるものの、現状では確認できなかった。」⁽²⁾とのことで、今回の根起きが起きるまで、貼石の存在は長く不明のままであった。今回検出した貼石は、大きいもので長さ約 40cm、高さ約 25cm、奥行約 25cm ほどの石材で、1 人が両手で持てる限界の重さのものである。肉眼観察からは、貼石の石材は花崗岩と推定され、表面は一部風化している。また、表面は一部が緑に苔むして、地中に隠れていた部分には風化や苔は認められなかった。また、末永が述べた通り、当陵の貼石は、平坦な部分を



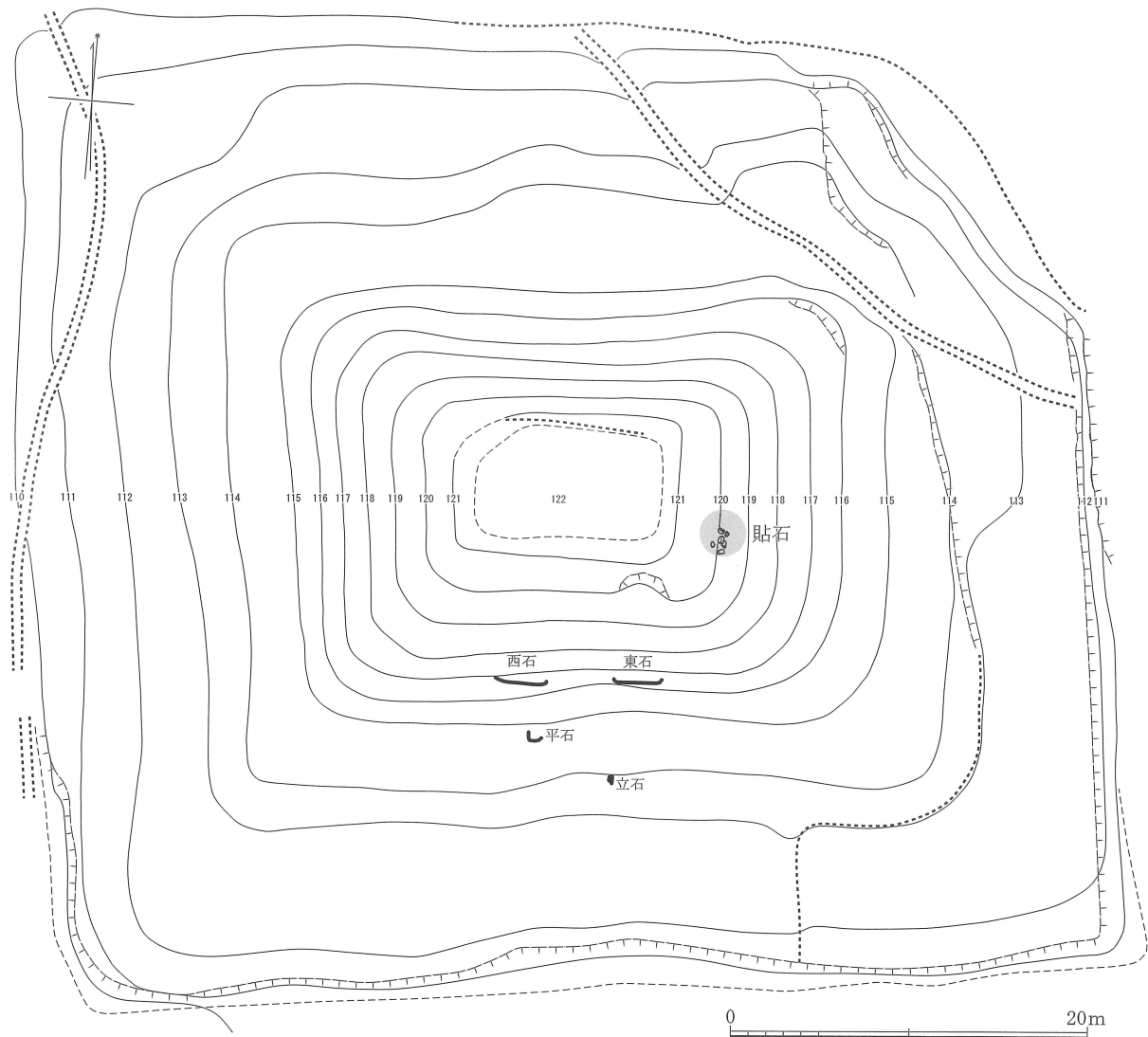
第72図 磯長山田陵 調査地位置図(1/1,000)

一重に並べて墳丘盛土上に貼りつけたものである。

貼石の類例 これらの貼石が当陵築造当時からのものなのか、それとも「文久の修陵」などによる後世のものなのか、今回の立会では情報が少なく、判断が難しい。ただし、当陵に近在する平石古墳群のシシヨツカ古墳、アカハゲ古墳、ツカマリ古墳でも同様に貼石を使っている、奈良県生駒郡平群町の西宮古墳、同県天理市の峯塚古墳、同県桜井市の舒明天皇陵にも例がある。このうち、峯塚古墳では、墳丘の 1、2 段目は無加工の自然石、3 段目には砂岩の切石を用いている。それらはいずれも 7 世紀前半頃のものだが、7 世紀後半頃にも、平野塚穴山古墳、牽牛子塚古墳、天武・持統天皇陵で凝灰岩を使った貼石の例がある。

貼石の変遷 上述のことから、大型墳の貼石については、7 世紀前半までは硬質の花崗岩主体、7 世紀後半頃からは軟質の凝灰岩主体というように、変遷が確かめられる。そうした墳丘の外表施設だけでなく、大型墳の埋葬施設についても 7 世紀前半頃までは、花崗岩など硬質石材によるものが主体で、7 世紀後半頃より砂岩や凝灰岩など軟質石材を石槨に使用したものが増えはじめ、7 世紀末頃にはキトラ古墳や高松塚古墳といった軟質石材のみのものへと変化することは周知の事実である。

貼石の評価 そうした 7 世紀における古墳の変化だけでなく、「文久修陵図」の「荒蕪図」と「成功図」の墳丘に石が描かれていないことや、「文久修陵図」以前に描かれた「河内名所図会」では既に「成功図」に類似した、現在と同様の状況が表現されていて、少なくとも当陵では「文久の修陵」による影響を評価す



第73図 磯長山田陵 貼石位置図(1/400)

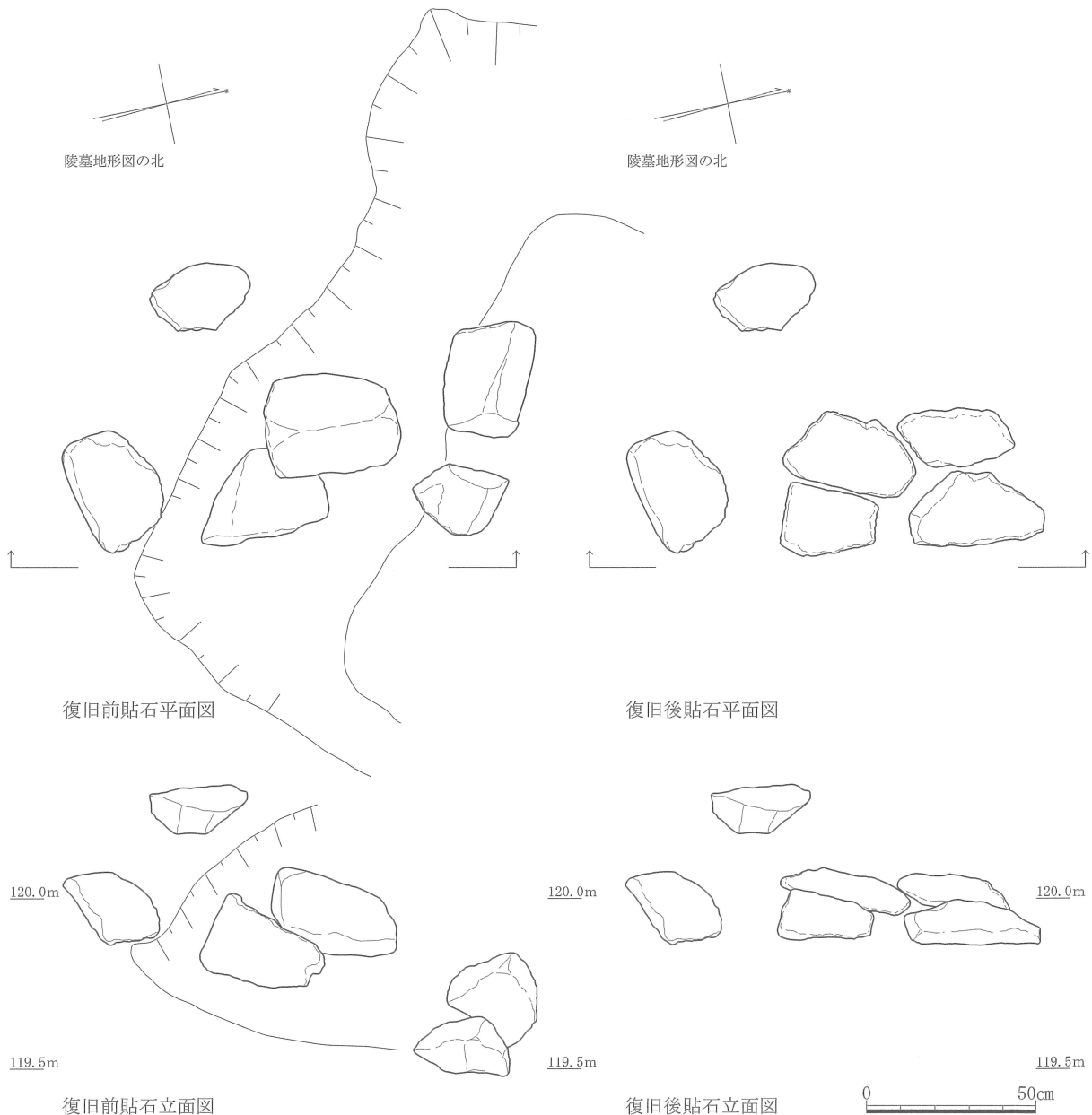
るには疑問が残ることから、今回検出した貼石については、築造当時のものとみても矛盾はない。ゆえに、ここでは当陵の貼石について、本来の墳丘に伴うものと考えておきたい。

まとめ

今回の立会は、掘削を伴わないものであったため、遺構の記録と復元作業を注意して実施した。立会の結果、予定通り貼石遺構を復元し、表面の保護も終えたため、根起きした被害木の処理工事は予定どおり施工した。貼石は、今回検出されたもの以外に墳丘の全面で確認される可能性があることから、今後当陵で再度根起きが生じた際には、とくに貼石が露出および毀損していないか注意する必要がある。（横田真吾）

註

- (1) 末永雅雄「推古天皇陵」『日本の古墳』、朝日新聞社、1961 年。
- (2) 福尾正彦「推古天皇陵の墳丘調査」『書陵部紀要』第 42 号、宮内庁書陵部、1991 年。



第 74 図 磯長山田陵 貼石平面図・立面図 (1/20)